

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「給食野菜、いつでも函館産 パック加工し冷凍保存」
 - 2) 「“認知症カフェ”、自宅に出張 ボランティアが話し相手に」
 - 3) 「グンゼとNECが共同開発、姿勢や心拍を計測できるIoTインナー」
-

1) 「給食野菜、いつでも函館産 パック加工し冷凍保存」

函館市教委は、小中学校の給食で函館産の野菜を通年で食べられるようにするため、市内で収穫された野菜をパック加工して冷凍保存する試験に取り組んでいる。規格外野菜を活用し、費用や学校側のニーズなどを調べて、将来の民間での事業化を目指す。

道教委によると、地場産品の給食活用は各地で進んでいるが、市町村教委が加工、保存の試験に取り組むのは珍しいという。

函館市教委が本年度、食品製造業者に委託して取り組んでいるのはジャガイモとニンジン計2.6トンの加工や保存。函館市亀田農協の協力で、市場に流通しない規格外品を入手した。価格はジャガイモが規格品の4分の1、ニンジンは半分程度といい、昨年秋に市内の業者が皮をむいて角切りや乱切りにし、蒸した上で冷凍保存した。事業費は約260万円。加工・保存コストは、野菜価格の圧縮分で補うという。

保存の野菜は今月下旬から始まる3学期に活用する。函館市立小中全74校（児童・生徒計約1万6000人）で、ハヤシライスやポトフなどにして各校2、3回ずつ提供する。市教委は試験を踏まえ、将来的に冷凍保存野菜の活用規模を拡大し、その需要に見合う事業を民間に促す方針だ。

通年で地元産の野菜が安定して食べられ、規格外野菜の有効活用にもつながるという点で合理的な取り組みだと思う。試験がうまくいき軌道に乗れば他の地域にも広がり、給食以外の場所でも活用されるのではないか。

2) 「“認知症カフェ”、自宅に出張 ボランティアが話し相手に」

厚生労働省は2016年度から、認知症の人や家族などが集まる「認知症カフェ」で交流しているボランティアが、認知症の人の自宅を訪問する事業を始める。家族の仕事の都合や地理的事情でカフェに頻繁に通えない人の家に積極的に「出張」して話し相手になり、本人や家族を支援する。

カフェは認知症の人や家族が、地域住民や専門職とお茶を飲んだり食事したりしながら情報を共有する場で、14年度には全国655カ所での運営実績がある。政府は昨年1月に策定した認知症対策の国家戦略にもカフェの設置推進を盛り込んだ。

厚労省は既に顔なじみで認知症の人と友人のようになっているボランティアを「認とも」と命名。認知症の相談業務を担い医療・介護サービスとのつなぎ役を務めている「地域支援推

進員」が、カフェで実際に本人や家族と交流がある人の中から自宅を訪問する「認とも」を選ぶ。

基礎的な講座を受けた「認知症サポーター」や学生、住民、地域貢献したい元気な高齢者らが「認とも」を務める。「認とも」向けの新講座の開催も検討されている。

厚労省は自宅訪問を実施する市区町村に対し、活動費を助成する。16年度予算案に関係費26億円を計上した。

認知症の人と家族の会の勝田登志子顧問は「当事者や家族に寄り添った活動にするにはまず、認知症カフェでボランティアが友人として、しっかりと信頼関係をつくることが重要だ」と指摘。「ボランティアは研修などで認知症に対する知識を深めることが望ましい」としている。

高齢化社会で認知症に悩む人、その家族など多いはずだ。認知症初期段階の人などは相談したくても中々話すらさがあるので、お茶をしにいく感覚で気軽に相談できる場所がいい。また、お世話をするご家族も周りに相談する相手がおらず鬱になるケースも多い。そういった人の心のケアにも繋がるいい支援だと思った。動けない方もいいので自宅出張が始まることで、より症状が深刻な人たちのケアも出来るはずだ。

3) 「グンゼとNECが共同開発、姿勢や心拍を計測できるIoTインナー」

グンゼとNECは、着るだけで姿勢や消費カロリー、心拍数を計測できるインナーを共同で開発したことを発表しました。インナーとBluetooth接続したスマートフォンを経由し、クラウド上でデータを管理できるとしています。

胸部にはNEC製の活動量センサーや通信機能を備え、柔軟性がある小型薄型のNEC製ウェアラブル端末を搭載しています。端末からデータを取得し、スマートフォンへBluetooth Low Energyで転送し、データをチェックできます。

本システムは、グンゼの持つ編み（ニット）に関する技術とNECの技術を組み合わせて開発されました。伸縮性や通気性を維持しながらも、姿勢センサーや配線として活用する導電性繊維をインナーに加工。一般的なインナーと同様に、洗濯も可能です。さらにグンゼの連結子会社であるグンゼスポーツのノウハウを活用、着用中の姿勢を測定できるデザインも実現しています。

また、データはNECのクラウド上に蓄積され、サービス事業者はこれらデータを活用可能。姿勢・ゆがみ・癖など身体の状態を可視化し、姿勢改善や肩こり予防に役立つアドバイスの提供、ユーザー間の比較や傾向分析などのヘルスケアサービスの提供を実現します。グンゼは本システムを利用し、2016年度中に腰痛予防や姿勢改善などのサービスを開始する予定です。

なお、この衣料型ウェアラブルシステムは、1月13-15日に東京ビッグサイトで開催される「第2回ウェアラブルEXPO」に出展されます。

スティックに体力管理する方や持病などでこまめな測定が必要な方にはありがたい開発ではないだろうか。カロリーや心拍数だけでなく、姿勢までデータ化してくれるのは驚きだ。この技術はそのままにデザインの改良や多様性を高めれば女性向けとしても売り出していけるのではないかと。